

研究成果報告書

近代シカゴのセツルメント運動で活躍した建築家とその意義に関する研究

——ハルハウスとボンド兄弟を中心として

執筆：倉田慧一

建築デザインと社会福祉の協働はいかにして可能か。これが本研究の核心的な問いである。その事例として、世紀転換期シカゴにおいて社会改良運動を展開したセツルメント「ハル・ハウス」の運営に関わり、また成長をつづける施設の設計にも継続的に携わった建築家ボンド兄弟に焦点を当てた。今回の調査を通して、これまでほとんど注目されてこなかったセツルメント運動における建築家の活動の意義と、そこで生み出され建築空間の特質について考察するための資料を得ることができた。



ハル・ハウス（現イリノイ大学シカゴ校）

1. 研究の概要

1-1. メンバー

倉田慧一（東京大学大学院）、小笠原伶生（神奈川大学）

1-2. 調査地

アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ、ミシガン州アナーバー

1-3. 調査の背景

米国では、革新主義時代（19世紀末から第一次世界大戦までの期間）に入ると、高度な産業化にともなって、地域コミュニティ、とくに移民が集住する地区の荒廃や混乱といった問題が顕在化する。これを目の当たりにした社会改良家は、貧困、コミュニティ、家庭といった社会問題に取り組み始める。

なかでも重要なのが、シカゴを拠点としたセツルメント、ハル・ハウスである。セツルメント運動とは、レジデントと呼ばれる社会改良家が、拠点に住み込み、貧困地区において生活改善のための啓蒙と相互扶助による住生活の拠点の形成を目指す活動である。単なる経済的支援ではなく、文化的プログラムを重視していた点や、都市社会学的なフィールドワーク調査をおこない、法制度の整備に寄与しようとしていた点が特徴である。

ハル・ハウスは、ジェーン・アダムズ (Jane Addams, 1860-1935) とエレン・ゲイツ・スター (Ellen Gates Starr, 1859-1940) という2人の社会改良家によって、1889年に設立された。ハル・ハウスは、シカゴの中心市街地からシカゴ川をはさんで西側のニア・ウェストサイドに立地していた。現在は大規模な大学キャンパスのあるこの地区だが、当時は南欧や東欧出身の新しい世代の移民が集まって住む、不衛生な木造集合住宅の多い地区であった。

1-4. 調査の対象

ハル・ハウスの施設群を設計したのは、アーツアンドクラフツ運動の影響を色濃く受け、ハル・ハウスの設立にも関わったことで知られるポンド兄弟である。ポンド兄弟は、兄アーヴィング・K・ポンド (Irving Kane Pond, 1857-1939) と弟アレン・B・ポンド (Allen Bartlett Pond, 1858-1929) の二人で建築設計事務所ポンド・アンド・ポンドを営んでいた。

今回の渡航では、ポンド兄弟の資料が所蔵されているミシガン大学とシカゴ美術館のアーカイブ調査に加え、彼らの設計した建築物の調査をおこなった。

1-5. 研究の目的

ポンド兄弟に関する研究は少なく、彼らの評価は未だ不明確となっている。ハル・ハウスも、歴史学や社会学分野では注目を集めているが、その建築的特徴は等閑に付されてきた。しかしハル・ハウスは、住空間の実験的な改革を主導しただけでなく、デザイン運動の拠点のひとつにもなっており、建築史的にも注目に値する事例だと言える。特にそのコミュニティに深く関わり、施設の持続的な成長を支えたポンド兄弟の重要性は明らかである。ゆえに本研究の目的は、ポンド兄弟によるセツルメント建築に関する理論と実践がいかなるものであったか検討することである。

2. 調査内容

2-1. ミシガン大学所蔵資料の調査

ミシガン大学ベントレー歴史図書館ポンド・ファミリー・ペーパーズには書簡、原稿、図面、写真、スケッチなど様々な種類の資料が含まれているが、デジタル化されている資料はごく一部にとどまっている。筆者らは、とくに建築設計や都市計画に関係のある資料の閲覧と撮影をおこなった。

右：ハル・ハウス（現イリノイ大学シカゴ校）

ハル・ハウスはすでに閉鎖され、現在その土地はイリノイ大学シカゴ校の一部となっている。建物の一部はキャンパス内において保存され、ジェーン・アダムズ・ハル・ハウス博物館として活用されている。大幅な減築と復原がおこなわれているため、最盛期とは大きく異なる状態である。



2-2. シカゴ美術館ポンド・アンド・ポンド・コレクションの調査

シカゴ美術館の資料は図面と写真が中心である。ミシガン大学に比べてデジタル化と公開が進んでいるものの、未だ完全なデジタル化と公開はおこなわれていない。筆者らは、デジタル化されていない資料を中心に閲覧と撮影をおこなった。

2-3. ポンド・アンド・ポンドによる建築物の調査

ポンド・アンド・ポンドの設計した建築物の調査をおこなった。アナーバーのミシガン大学ミシガン・リーグ、ミシガン・ユニオン、プレス・ビル、シカゴのハル・ハウス、レヴェンスウッド教会を調査した。

3. 成果および所感

3-1. アーカイブ調査の成果、所感、今後の展望

ミシガン大学の資料を分析するなかで、ポンド兄弟の建築設計に関する理念や都市問題の認識について知る上で重要な資料が含まれていることが明らかになった。

たとえば、Box3 のフォルダー「Notes and Manuscripts re: Social Settlements」に収められた資料には、セツルメントの理念・方法・評価や、欧州における住宅供給の事例といった話題がみられる。これらの資料は、原稿執筆のための下調べや講演のためのメモなどに用いられたと推測されるフォーマットのものが多い。

このなかでアレン・ポンドは、移民や階級の問題について、社会や文化の「一体感」という観点から問題意識を述べ、文化的プログラムや共同生活を通じた異なる階級や民族の関わり合いの必要性や、住宅や衛生など社会状況の調査の必要性を一貫して訴えている。他方で、講演の聞き手は、YMCA に集まる大学生から実業家の集まるクラブまで幅があり、聴衆の関心に合わせて変化する譲歩あるいは強調点が注目される。また、執筆段階だからこそ書き残された批判など、出版されていない内容についても今後検討したい。

右：資料調査の様子

ミシガン大学の閲覧室における資料調査の様子である。ダンボール 13 箱と A1 サイズの図面が棚 2 段分と、多量の資料が保存されている。



また、欧州、とくにドイツ、オランダ、イギリスの住宅供給の事例についてのメモが多く残されていることが特徴的である。その内容から、住棟の配置、とくに中庭の扱いや、都市における田園的な配置計画に関心を有していたことがうかがえる。

欧州のハウジングに関心を持っていたことは、同時代の欧州や米国の状況を考慮すると、興味深いことであるように思われる。この時代、その嚆矢となったイギリスはもちろんのこと、ドイツやオランダにおいても、田園都市運動が盛り上がりを見せていた。しかし、農村回帰志向を強く打ち出したドイツ、大都市における配置計画の対処療法として田園都市思想を受容したオランダなど、各国の田園都市はそれぞれ異なる社会背景とイデオロギーを有している。それゆえに、アレン・ポンドによる参考事例の選択自体に、欧州の田園都市運動に対する評価を読み取ることができるのではないだろうか。

アレン・ポンドは実際に何度も欧州を訪問していたため、こうした欧州の住宅供給の現場も多数訪れていたはずである。それ以外には、英国で出版されたドイツの都市計画や住宅供給を紹介する書籍を経由して研究していたと思われる。今後、情報源となった資料などについても検討をおこないたい。

これらの資料の分析をさらに進めることで、これまでの研究では知られてこなかったポンド兄弟（とくにアレン・ポンド）による住宅問題に関する情報収集とシカゴにおけるその知識の応用について、より詳細に明らかにすることが期待される。

3-2. 建築物調査の成果、所感、今後の展望

今回の調査では、ポンド・アンド・ポンドが拠点としていたシカゴだけでなく、彼らの生まれ育ったアナーバーやデトロイトも訪れることができた。

アナーバーは、ミシガン大学を中心とする学園都市であり、ポンド兄弟はこの街の有力な家に生まれた。その人脈によって、彼らは様々な依頼を得ており、その保守的な顧客の好みによって、彼らの作風が形成されていったことが指摘されている。大学キャンパスの中心部にはポンド兄弟設計の施設が建ち並んでいる。この、アナーバーの都市の空気感に触れることができたのは、有意義なことであった。

また、シカゴ、デトロイト、アナーバーと、それぞれ五大湖周辺の性格の違う3都市を比較する視点を得られたことも今回の成果であったと言えるだろう。



上：ミシガン・リーグ

下：ミシガン・ユニオン

ミシガン・リーグおよびユニオンは、いわゆる学生会館であり、現在も大学施設として使用されている。ビルディング・タイプは異なるものの、共同生活のための施設という点では、セツルメント建築と比較して論じるべき建築物であるように思われる。

4. 結びにかえて

レヴェンスウッド教会の調査に訪れたのが偶然日曜の午前だったので、そのまま礼拝にも参加することになった。ベンチに腰掛けて開始を待っていると、白髪の男性から知らない言語で話しかけられた。戸惑っていると、彼は

「もしかしてスペイン語が話せるかと思って。初めてだよね、よろしく。」

と微笑みながら言って、前列へと消えていった。

礼拝自体も英語とスペイン語を併用しておこなわれていて、同じ言葉が 2 つの言語で繰り返される。ゴスペルも、1 番が英語、2 番がスペイン語というように、徹底して英語とスペイン語を併用する。わたしたちは、スペイン語の歌詞カードをローマ字読みして、あおるようなリードヴォーカルに何とか合わせようと、しどろもどろしていた。

そして、通りすがりの外国人なのに、今日は一緒にいてくれてありがとうと言われ、礼拝の後のランチにも招かれた。出会って 2 時間くらいの人々から、実はもっとスペイン語コミュニティと関わりたいと思っているけれどなかなか人が集まらないとか、現在使用している教会の賃料が高いから引っ越すとか、教会の細かな事情まで聞くことになったのであった。

ポンド兄弟の移民と都市環境に関する問題関心と、21 世紀アメリカの移民の問題は、もちろん異なるものである。しかし、ポンド兄弟の問題関心をあえて現代に引き寄せて理解するのであれば、彼らが目指していたのは、人々の交流を担保するための物理的な場所、つまり社会学者エリック・クリネンバーグの言うような「社会的インフラ」に近いのかもしれない。そうした場所の重要性は、現代において一層強く指摘されている。この午前の出来事はある種の「社会的インフラ」を感じさせるものであり、どこか 19 世紀にポンド兄弟が取り組んでいたことの延長線上にあるようにも思えた。ポンド兄弟の設計した建築がそのような役割を引き受けている光景を見ることで、ポンド兄弟の目指したことが実感を伴って理解できたように感じられたのである。

このような機会は、前田記念工学振興財団特別研究テーマによる助成をはじめ、多くの方々から頂いたご支援、ご助言、ご協力によって得られたものです。深く感謝申し上げます。



レヴェンスウッド教会